

# C O R R E N T E

Centro Culturale Italo-Giapponese di Kyoto

BEL CICLISMO!

## \* 素晴らしき自転車レース⑦ \*

谷口 和久

### ●イタリア版シンドラのリスト

とある国のイメージと、その国の映画のイメージには通じるものがある、と言えるだろう。たとえば、こんな図式で。

- アメリカ = ハリウッド映画  
= 勧善懲悪、ハッピーエンド
- フランス = フランス映画  
= エスプリ、アンニュイ
- 日本 = 日本映画  
= しみじみ、ほのほの(?)

A=B、B=C、でA=Cだ。

なら、ロシア映画はどうなのか、中国映画は？インド映画についてのおまえの見解は？！と、すかさずたたみ込まれると、「これは映画評ではないので・・・」とおよび腰になるしかないのだけど、これだけは言える。「イタリアには、この法則が当てはまらない」と。

一般的には、イタリア = 陽気でにぎやかなイメージだと思うが、映画となるとまったく逆。戦後のネオレアリズモから始まって、フェリーニの「道 *La Strada*」やヴィスコンティの「ベニスに死す *Morta a Venezia*」などなど。私にとってもっとも衝撃的だったのは、ネオレアリズモの巨匠ロッセリーニの1947年の作品「ドイツ零年 *Germania anno zero*」。戦争映画ながら、戦場はまったく描かれていない。しかし、これほど悲惨な映画は見たことがない。これを見たあと、しばらく人と口をきくのもいやになるほど、なんともやるせない、いたたまれない気分させられたものだ。まだご覧

になっていない方には、ぜひおすすめします。(こんな紹介で、見たいと思われる方がいるとも思えないが)

そんな気分にはさせられるものの、なにかしら人間に対する透徹した視点というか、ヒューマニティといったものが感じられるのは事実だ。この遺伝子は近年の作品にも引きつがれ、「ライフ・イズ・ビューティフル *La vita è bella*」や「二人のトスカーナ *Il cielo cade*」などは、アカデミー賞をはじめ、名だたる国際映画賞を受賞している。そして、偶然かどうかはわからないが、この二作品はイタリアにおける第二次大戦中のユダヤ人迫害を描いたものである。



【ドイツ零年 *Germania anno zero*】

ユダヤ人迫害を描いたものという、我々日本人に一般になじみのあるものとしては「アンネの日記」であったり、映画でいえば「シンドラのリスト」などがあり、あまりイタリアでのユダヤ人迫

害というのは、イメージとして思い浮かばないものだが、枢軸国であったイタリアにおいては、ドイツ本国やドイツ占領下の国々ほどではなかったにせよ、同様の事態が起こっていた。そして戦後には、パルチザンと同じように、ユダヤ問題が映画のテーマとして取り上げられるようになったのである。

今からお話するのは、荒れ狂うファシズムの時代にあっても、迫害されたユダヤ人たちのために、ひと肌もふた肌も脱いだ、とあるヒューマニティあふれる自転車レーサーの物語である。

### ●“Il Pio Gino” 敬虔なる男 ジーノ・バルタリ

1943年のある日、イタリア中部、聖フランチェスコゆかりのアッシジにある聖クイリーコ修道院でのこと。ふたりの修道女が捨て子ポストの小さなすき間から、そっと外をうかがうようにのぞいていた。しばらくすると、そのすきまの向こうに、自転車のユニフォームからつき出た、引き締まった筋肉質の足がにゅっとあらわれた。そして低くさやく声が、ポストのすき間ごしに響いてきた。「バルタリだ」。

声の主は、修道女にいくつかの証明写真と書類を、ポストのすき間から差し出した。これらは、自転車のチューブの中に隠されて、ここまで運ばれてきたものである。なぜなら、これらの書類は当時のイタリアにあっては違法かつ危険極まりないものであったから。バルタリが自転車のチューブにしこんできたのは、ユダヤ人がファシストの追手から逃げるために、偽パスポートを作成するための証明写真と書類だったのである。

第二次大戦の前後を通じて、ジーノ・バルタリ Gino Bartali は、“Campionissimo”ことファウスト・コッピと人気を二分するほどの実力と名声を兼ね備えた選手であった。レースの前に、参加全選手を引き連れて教会でミサを行うほど敬虔なカトリック信者でもあった彼は“Il Pio Gino”（敬虔なるジーノ）と呼ばれ、単なる人気選手という位置づけを越えて、ある意味、イタリア国民の精神的支柱ともいえるほどの存在であった。

時の独裁者ムッソリーニも、バルタリが反ファシズムの旗手であることを知りながら、あまりの存在の大きさに、へたに取り締まると国内における

自分の立場を危うくしかねないということで、なかなか手出しができなかったほどである。一方、バルタリとしても、そういった立場は認識していたとはいえ、やはり公然堂々とユダヤ人の逃亡を手助けするというわけにはいかず、自転車のトレーニングをよそおって書類を運んだり、できあがった偽パスポートをユダヤ人のもとに届けたりしていたのである。胸に「バルタリ」と、大きく書かれたジャージを身につけて。



【“Il Pio Gino” ジーノ・バルタリ】

余談ではあるが、ご存知の方も多いと思うが「ファシズム “fascismo”」はイタリア語なのである。私自身もイタリア語を勉強するまでは、ファシズム = ナチス = ドイツ語と、すっかり思い込んでいた。“fascio”（束）という単語から派生して、社会主義の全体行動、ひいては国家全体主義をファシズムと称するようになったということだ。

バルタリは1914年、フィレンツェ南郊のポンテ・ア・エマ出身。当館のマルコ講師もフィレンツェ出身であり、彼にバルタリのことを聞いたところ、なんとマルコとバルタリは遠い親戚であるそうなの！バルタリは、2000年まで長生きしたというこ

ともあり、地元で見かけたこともあったそうで、趣味で自転車に乗っていたマルコに言わせると、やはりバルタリはイタリアにおいて「特別な存在」として語りつがれているようである。

### ●バルタリ vs. コッピ

バルタリ自身はもともと農家の出身で、コッピとくらべると派手さはなく、当時のイタリアではコッピのファンというと都会的・先進的なイメージ、一方のバルタリ・ファンは田舎的・保守的なイメージであった。あるとき、レース後のインタビューでバルタリが「神のご加護により勝利したのだ」とコメントしたところ、それを聞いたコッピが「神さまはそんなにヒマじゃないだろ」と皮肉っぽく言ったそうだ。

5つ年の離れた二人であったが、すでにジロ・ディ・イタリアやツール・ド・フランスに勝利していたバルタリとおなじチームにあとからコッピが入り、「両雄並び立たず」の言葉どおり、かならずしも二人の関係は良好なものではなかったといわれている。



【ボトルを受け渡しするバルタリとコッピ】

本来、自転車競技においては、ひとつのチームの中に一人の「エース」と、その他大勢の「アシスト」からなるのが基本的なチーム編成であり、おなじチーム内にエースが複数混在すると、チーム内で無用の主導権争いがおこってしまうのである。とくにバルタリとコッピのように、それぞれが総合優勝を狙うことのできる力を持ち、彼ら自身も狙っているような選手同士であると、その確執は相当なものである。同じような確執は、近年ではツール・ド・フランスのアメリカ人選手ランス・アームストロングとスペインの若手強豪アルベルト・コンタドールが、同チームでありながらともに総合優勝を争っ

た2009年ツールでの接戦・舌戦（土俵外での）が思い起こされる。

1948年のツールでのこと。ちょうどそのとき、イタリア政界は共産党書記長トリアッティの暗殺未遂で大揺れに揺れており、あわや革命か、というほどの危機的状況であった。山岳ステージのスタート前、首相から、暗殺未遂事件に沸き立つ民衆の目をそらすべく、「山岳でアタックをかけろ」との指示がバルタリに下った。のちに昏睡から覚めたトリアッティは開口一番「バルタリはどうだった？」。そのときすでに、バルタリは見事にアタックを決め、勝利をおさめていたのである。



【峠をトップで通過するバルタリ】

晩年、インタビューで「天国でライバルたちに会ったら、なんとあいさつを？」と聞かれたのに対して、山岳でならしたバルタリはこう答えた。「死んだら、すぐには天国に行かずに、まずは煉獄の方がいいな。だって、そっちの方が登りごたえのある坂が多そうじゃねえか “Quando sarò morto, non vorrei andare subito in paradiso, ma in purgatorio: lì almeno c'è ancora una salita da fare”。」

#### 【参考資料】

Daniele Marchesini, *L' Italia del Giro d' Italia*, il Mulino, 2009

William Fotheringham, *A Century of Cycling*, Motorbooks Intl, 2003

Wikipedia.it 関連情報

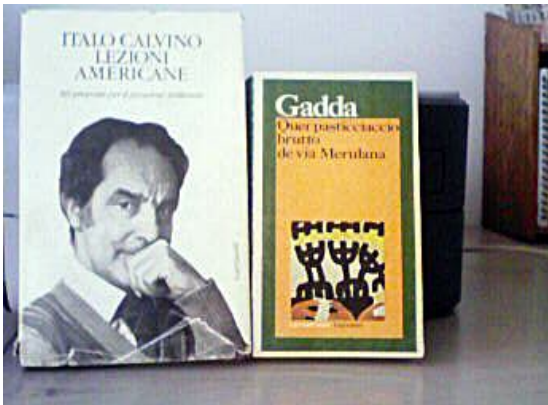
(当館スタッフ)

## 『カルヴィーノとアーティチョーク』

### 第6回

堤 康德

カルヴィーノの遺作『アメリカの講義』(Italo Calvino, *Lezioni americane: Sei proposte per il prossimo millennio*, Milano, Garzanti, 1988. 米川良夫訳『カルヴィーノの文学講義——新たな千年紀のためのメモ』朝日新聞社)は、鋭敏な批評家でもあった著書が、斬新な切り口によって古典から現代文学までを縦横に論じたきわめて刺激的な評論である。この本には、1985年11月から翌年の3月にかけてハーヴァード大学で予定されていた6回の連続講義のためのタイプ原稿が再現されている。カルヴィーノは1985年9月に急死してしまうので、実際の講義が行われることはなかったが、草稿が完成していたのは、そのうちの5回分だった。各回のテーマは、「軽さ」、「速さ」、「正確さ」、「視覚性」、「多様性」であり、これらがそのまま本書の各章のタイトルとなっている。



【『アメリカの講義』と『メルラーナ街の恐るべき混乱』】

カルヴィーノは、最終章「多様性」(Molteplicità)を、カルロ・エミリオ・ガッダの長篇小説『メルラーナ街の恐るべき混乱』(Carlo Emilio Gadda, *Quer pasticciaccio brutto de via Merulana*, Milano, Garzanti, 1957. 千種堅訳、早川書房)の長い引用で始めている。ガッダ (Milano 1893—Roma 1973)

は、カルヴィーノが敬愛するイタリアの作家のひとりであるが、その文体は、カルヴィーノも認めるように、きわめて難解である。1960年代の新前衛派によって師とみなされ、ジョイスの後継者とも評されたガッダの代表作『メルラーナ街の恐るべき混乱』は、ローマ方言をはじめとするさまざまな南部の方言、外国語、専門用語が入り乱れ、主筋がしばしば逸脱して、細部の描写と哲学的な省察がそれにとって代わる。小説の舞台は、ファシズム体制下の1927年のローマ。メルラーナ街の集合住宅で、宝石の窃盗と、殺人という2件の犯罪が相次いで起こり、主人公のイングラヴァッロ警部がその捜査にあたるが、事件は解決にいたらない。カルヴィーノは本書をまず、「百科事典としての、認識の方法としての、またとりわけ世界の事物や出来事や人間の関係の網の目としての同時代小説」と定義する。

カルヴィーノはさらに次のように述べている。

カルロ・エミリオ・ガッダはその生涯を通じて、世界をひとつのからまり、もつれ目、あるいは糸玉として描こうと努めました。その解きほぐしにくい複雑さを、すなわち、あらゆる出来事を産み出すために競合する互いにきわめて異質の諸要素の同時的な存在を、まったく軽減することなく描こうと努めたのでした(Italo Calvino, *op. cit.*, p. 103)。

ここで、カルヴィーノが引用したガッダの文章を読んでみよう。引用箇所は、いわばイングラヴァッロ警部の世界観の一端が説明された、小説の出だしの一部であり、ガッダの文体の特徴がここに早くも現れている。

彼はとりわけ次のように主張していた。すなわち、予測不能な大惨事は、けっして唯一の動機や単数形の原因の、帰結でもなければ結果でもなく、それは渦のようなもの、世界の自意識における一点の熱帯低気圧のようなものであって、ありとあらゆる多種多様な諸原因(*tutta una molteplicità di causali*)がしめし合わせたようにそこを目ざして収斂するのだ、と。彼は、結び目(*nodo*)、もつれ目(*groviglio*)、からまり(*garbuglio*)、さらに、ローマ方言で糸玉(*gomitolo*)を指す *gnommero* という言葉も使った。しかし、法律用語の「諸原因」(*le causali*,



la causale)は、ほとんど彼の意に反して、つい口から滑り出てしまった。哲学者たち、つまりアリストテレス、あるいはイマヌエル・カントから私たちが受けついで「原因のカテゴリーの意味を私たちのなかでつくり直し」、単一の原因を複数の原因に置き換える必要がある、という考えが、彼にあって中心的で強固なものとなっていた(Carlo Emilio Gadda, *Quer pasticciaccio brutto de via Merulana*, Garzanti, 1982, pp. 2-3. Italo Calvino, *op. cit.*, pp. 101-102.)。

ところで、もつれ目(groviglio)から糸玉(gnommero)にいたるまで、gで始まる頭韻法が用いられた文章があるが、からまり(garbuglio)という言葉から、マンゾーニの歴史小説『いいなづけ』に登場するアツツェッカガルブリ(Azzecca-garbugli)弁護士を連想するのは私だけだろうか? 『いいなづけ』によってその名を不朽にしたアレッサンドロ・マンゾーニは、ガッダがその後継者たらんとした同じミラノ出身の作家である。もともとミラノ方言で *attaccabrighe* 「口論好き」を意味するという *azzeccagarbugli* が、現代では、「三百代言」、「いんちき弁護士」の意味で用いられるのは、この『いいなづけ』の登場人物が普通名詞化されたからである。主人公レンツォは、婚約者ルチアとの結婚を阻止するように司祭を脅迫する領主のドン・ロドリーゴにたいして、法的に対抗できないかどうか、アツツェッカガルブリ弁護士のもとに相談に行くのだが、この弁護士は、ドン・ロドリーゴの名前を聞かぬやいなや、権力者とことをかまえるのを恐れてレンツォを追い返してしまう。すりきれた法衣を部屋着としてまとう弁護士の書斎の本棚には、埃をかぶった古い本が並び、テーブルは書類で埋まっている。この散らかった書斎の描写と弁護士の術学的なふるまいに、17世紀の司法の混乱ぶりが凝縮されているとも考えられるだろう。

ガッダの小説の題名となった「混乱」(*pasticciaccio*)は、ファシズム体制下における、あるべき社会的・法的秩序からの逸脱、混乱もおそらく示唆しているはずである。

『アメリカの講義』に戻ろう。カルヴィーノは、ガッダの文学世界を特徴づけるグロテスクな喜劇性へと論を進めてゆく。カルヴィーノによれば、つね

にデフォルメするガッダ独特の描写方法は、「認識とは、現実に関心するものであり、したがって現実をデフォルメすることである」という自覚に由来する。「世界が彼の眼下でデフォルメされればされるほど、それ自体デフォルメされ、混乱しているこのプロセスに、作者の自我(self)は巻きこまれてゆく」のである。

結論から明らかになるように、カルヴィーノが「多様性」という鍵概念によって夢想していたのは、「人間個人の自我(self)の外に構想される作品」であり、鳥や木々や石やセメントが語り出すような作品である。オイディウスの『変身物語』、あるいはカルヴィーノが編集した『イタリア民話集』に通じる世界観がここでも現われている。

最近、「生物多様性」という言葉をよく耳にする。2010年は国連生物多様性年に定められていた。大聖堂のファサードを思わせる、渋谷の国連大学正面玄関わきにも、昨年、「生物多様性」(Biodiversity)の標語が掲げられている。「生物多様性」の保全は、温暖化と自然環境の破壊が急速に進む地球全体にとって、緊急な課題であろう。私は、国連大学の前を通るたびに、カルヴィーノのことを思い出す。カルヴィーノのいう「多様性」の概念には、偏狭な人間中心主義がもたらす自然破壊への警告がこめられていることはたしかだろう。しかしカルヴィーノの多様性は、生物だけに限定されたものではない。それは、おそらく、鉱物や人工物によっても構成される宇宙全体のイメージをとらえるための鍵でもあったのだ。

『アメリカの講義』には引用されていないが、カルヴィーノの「多様性」とかかわると思われる、いかにもガッダらしい一文を、『メルラーナ街の恐るべき混乱』から引いておきたい。イングラヴァッロ警部が、窃盗犯の目撃者たちの証言を集める場面である。

皆がいつぱんにしゃべっていた。さまざまな声と顔が入り混じっていた。女中、女主人、ブロッコリ。ふくれ上がった腫れぼったいひとつの買い物かごから、ブロッコリの巨大な数枚の葉がはみ出してしていた(Carlo Emilio Gadda, *op. cit.*, p. 26)。

ここには、グロテスクな現実の多様性が露出し

ている。混然一体と重なり合っているのは、さまざま顔と声、そして、人間とブロッコリである。私は、このブロッコリに、アーティチョークを重ねてみたくなる。

カルヴィーノは、『アメリカでの講義』以前にもガッダ論を書いていた。メリディアニ叢書の『評論集』が1995年に刊行されるまで未公表だった論考のなかに、「世界はアーティチョークである(カルロ・エミリオ・ガッダのために)」と題された1963年の一文がある。フランスのある文学賞の選考会で、ガッダの小説『悲しみの認識』(*La cognizione del dolore*)を支持するカルヴィーノがフランス語で書いた発表原稿である。1963年は、彼自身の小説『投票立会人の一日』が刊行された年でもあった。この作品で用いられたアーティチョークの比喩については、連載第4回で触れたとおりである。いかに、カルヴィーノがアーティチョークのイメージに魅了されていたかが、このガッダ論からもうかがえる。

世界の現実とは、私たちの目には複合的で棘だらけであり、ぎっしりと重なり合ういくつもの層から成っています。ちょうどアーティチョークのように。文学作品において私たちに大切なことは、つねに新しい読みの次元を発見することによって、際限のないアーティチョークのように、その作品の頁をめくり続ける可能性なのです。したがって、ここ数日來話題にのぼった重要で卓越したすべての作者たちのなかで、大作の名に値するのは、おそらくガッダだけだと私たちは主張するしだいであり、まず(Italo Calvino, *Il mondo è un carciofo*, in ID.,

*Saggi. 1945-1985*, a cura di M. Barenghi, Milano, Mondadori, 2007, vol. I, p. 1067.)。



【刑事 “Un Maledetto Imbroglione”】

『メルラーナ街の恐るべき混乱』は、1959年にピエトロ・ジェルミによって映画化されている。タイトルは、『呪われた混乱』(*Un Maledetto Imbroglione* 邦題『刑事』)。監督のジェルミ自身がイングラヴァッロ警部を演じ、クラウディア・カルディナーレが犯罪の鍵を握る女中役を熱演している。アリダ・ケツリの歌う主題歌『死ぬほど愛して』(*Sinnò me moro*. ローマ方言で *se no muoio* 「さもなければ私は死ぬ」の意)の「*amore, amore, amore, amore*」で始まる哀愁を帯びた旋律をご記憶の方も多いただろう。もちろん、ミステリーに焦点をしばった映画と原作はまったくの別物である。大きな相違点は、まず時代背景がファシズム体制下から、60年代のローマに移されていること、そして、映画では、最後に犯人が明らかになる点である。

(翻訳家、慶應義塾大学講師)

## … 会館 だ よ り …

### イタリア語 無料体験レッスン

4月より開講の春期イタリア語講座に向けて、体験レッスンを開催します。入門者向け。事前予約制。

- 梅田: 大阪駅前第4ビル  
4/3 (日) 13:00~14:30  
4/6 (水) 19:00~20:30
- 四条烏丸: ウイングス京都  
4/4 (月) 19:00~20:30

### ● 京都本校: 日本イタリア京都会館

4/2 (土) 11:00~12:30  
4/2 (土) 13:00~14:30  
4/5 (火) 11:00~12:30

### スペイン語 無料体験レッスン

入門者向け。事前予約制。  
日時: 4/2 (土) 16:00~17:30  
会場: 日本イタリア京都会館 本校  
講師: 当館スペイン語講師

### ポルトガル語無料体験レッスン

入門者向け。事前予約制。  
日時: 4/5 (火) 19:00~20:30  
会場: 日本イタリア京都会館 本校  
講師: 当館ポルトガル語講師

編集・発行 / (財) 日本イタリア京都会館  
〒606-8302 京都市左京区吉田牛の宮町4  
TEL: (075) 761-4356/FAX: (075) 761-4357  
E-mail: [centro@italiakaikan.jp](mailto:centro@italiakaikan.jp)  
URL: <http://italiakaikan.jp/>